

## 発表要旨

### 〈研究発表〉第Ⅰ会場

中国古典詩における「志」と「情」の問題をめぐつ

て

佐藤 祐紀

中国古典詩を貫く精神として、「詩言志」説がある。この「詩言志」とは、経典の一つである『尚書』舜典に「詩言志，歌永言，聲依永，律和聲，八音克諧，無相奪倫，神人以和。」とあり、『毛詩』「大序」に「詩者志之所之也。在心為志，發言為詩・・・」とあるのを出典とする。『尚書』・『毛詩』「大序」によれば、詩は本来、自身の「志」を言うものであった。

一方で、西晋・陸機（二六一―三〇三）は作家としての自身の体験を踏まえつつ、「文賦」〔『文選』卷十七〕に詩作法を述べるなかで、「詩縁情而綺靡」（詩は情に縁りて綺靡なり）と「詩縁情」説を提示し、詩は感情によるものであるとした。以来、詩は自身の感情を述べるべきものとなった。それにより、詩は自身の「志」を言うものなのか、「感情」を言うものなのかという「詩言志」説と「詩縁情」説との対立関係が起り現在も決着は付いていない。また、「詩言志」

の「志」が何を指すのかということについても定説はない。

本発表では、従来対立関係とされてきた「詩言志」説と「詩縁情」説が本当に対立するものなのかどうかを、特に後漢から魏晋南北朝時代を対象にして先行研究を援用しつつ検討したい。また、「詩言志」の「志」は具体的には何を指すのかということについても検討したい。

### 馮夢禎『快雪堂日記』について

植松 宏之

『快雪堂日記』は明代の文人馮夢禎が官を辞した後、杭州に住まいをうつして悠々自適の日々をおくった頃の記録である。基本的に万曆十五年（一五八七）から万曆三十三年（一六〇五）までの十九年間にわたって書き綴られている。明代、風光明媚な都市である杭州について多くの遊記（紀行文）が書かれ、その中には日記体のものであるが、これほど長期にわたり杭州を中心として書かれた日記は他に例がなく貴重である。

作者の馮夢禎は字を開之といい、号は真実居士。萬曆五年（一五七七）の進士。秀水（今の浙江省嘉興市）の人。著作に『快雪堂集』

六十四巻がある（日記もここに収録されている）。日記の冒頭に「私は丁亥の年に天目山を旅して以降、目に触れたものを夜になると必ず書き留めていたが、はなはだ乱雑で順序だっていなかった。いま十のうち三を除いて日記とした。（後略）」とあり、旅の記録の執筆がその後の日記作成のきっかけとなったことが分かる。

日記の内容は多岐にわたり描写の範囲も杭州のみに限らないが、本発表では日記と遊記の関わり、及び馮夢禎の杭州での生活の様子を中心に考察をしていきたい。

## 『今鏡』と『古事談』との関係について——直接関係

説の再検討と書承態度——

鈴木 和太

源顕兼（一一六〇～一二一五年）によって編纂された『古事談』は、典拠として、『扶桑略記』や『中外抄』といった史書や漢文体の貴族日記を用い、しかも、原典から忠実に書承している説話集として知られるが、今西実氏は、『古事談』が披見した資料のなかに、歴史物語である『今鏡』の存在を指摘し、和文体を、適宜、漢文体あ

るいは準漢文体に改めながら書承した、と結論された。

今西説に長く異論はなかったが、改めて『今鏡』と『古事談』とを比較してみたところ、氏とは反対に、直接関係を疑わせる例証が散見された。また、氏の論によれば、『古事談』が和文体を漢文体や、それに準ずる文体に改変した、というのだが、この議論は単に『古事談』の出版研究に留まらず、『古事談』の書承態度にも関わる問題であり、『古事談』という、いち説話集の全体像を捉えるために不可欠な基礎的研究であると考えられるから改めて慎重にみていきたい。そこで本発表では、今西氏の説を踏襲した場合に生ずる疑問を本文比較を通じて挙げ、『古事談』の文体や『今鏡』の典拠となった資料について触れながら、『今鏡』と『古事談』の関係について、および『古事談』の書承態度について再度の検討を図っていきたい。

## 日本語学史・国語教育史における岡倉由三郎の再評

価

岡田 誠

本発表は、日本語学史及び国語教育史における「岡倉由三郎の再

評価」を行うものである。岡倉由三郎（一八六八—一九三六）は、「岡倉天心（一八六三—一九一三）の弟」「英語教育」「東京放送局（現在のNHK）初代英語講座講師」「『新英和大辞典』（研究者）」「『英文学叢書』一〇〇巻（市河三喜と共編）」などで知られている。しかし、本来の出発点は、チェンバレンに学んだ日本語学にある。さらには、英語教師と同時に国語教師でもあったため、初期の頃の著作は日本語学のものである。その後、夏目漱石とともにイギリスに留学し、英語教師に転向していくのだが、その英語教育論の中にも国語教育の重要性を繰り返し説いている。また、ラジオ講座の講師としても著名であり、音声教育に熱心であったが、それは日本語学にも言えることであり、英語教師に転向してからも、日本語の音声などの著作も残している。従来、岡倉由三郎は、日本語学史・国語教育史の中でも、大きくは取り上げられていない。しかし、日本語学者、国語教育者、英語教育者として重要な点を指摘し、日本語と英語の二つの顔を持ちながらその影響を後世に与えた点などを指摘したい。

## 〈研究発表〉 第Ⅱ会場

### 「新しい世代」の〈私小説〉批判―『1946・文学的考察』の問題構成

伊豆原 潤星

『1946・文学的考察』は、加藤周一・中村真一郎・福永武彦の三人が、雑誌『世代』に一九四六年初頭から年末まで「カメラ・アイズ」という表題で連載したものを、翌一九四七年に真善美社から刊行したものである。当時、二七歳前後であった彼らは、戦後の新しい文学は、事実を映しただけの〈私小説〉的小説からではなく、虚構の小説から始まり、その道は世界文学に通じるものであると述べている。『1946・文学的考察』は、「戦後文学」の赫々たるマニフェスト（篠田一士「解題」〔富山房百科文庫版』1946・文学的考察』所収）として機能したと言ってよいだろう。しかし、その主張は、一九三〇年代における小林秀雄らによる論の反復・変形であり、必ずしも新しいものではない。同時代において、彼らの論が広く流布し影響を与えたのは、むしろ、彼らの登場の仕方や訴え方の新しさに求められるのではないか。

これまで、文学史には登録されながらも、『1946・文学的考察』は積極的に論じられてこなかった。本発表では、加藤・中村・福永

ら三人の「新しい世代」の文学者が戦後文学に与えた影響、また、彼らの〈私小説〉批判の内実について併せて考察していきたい。

## 大西巨人『地獄篇三部作』の挑戦―乗り越えの対象

としての鏡像―

杉山 雄大

大西巨人作『地獄篇三部作』（光文社、二〇〇七年八月初出）の執筆時期は一九四七年の夏から翌年の五月頃までの間であったと考えられる。本発表は『地獄篇三部作』を執筆時期に置き、巨人の創作活動の軌跡や同時代の文脈の中に有機的に位置づける試みである。

『地獄篇三部作』の執筆時期に、巨人は志賀直哉批判を集中的に書いている。そこで巨人は、小説の本質を事実に対する独立性・仮構性に求め、作中人物⇨実在の人物となること、小説の原理上不可能であることを論じた。巨人によれば、小説において「私怨」を晴らすことは、「その本来の実際において複数」である対象の「集約または代表または表象」たる「単数対象」に「公怨」を晴らすことと同じである。ここには、作中人物を実在する人物の典型・類型と

捉え、本質的な関係において実在の人物と作中人物とを対照する思考がある。同時期に書かれた『地獄篇三部作』では、実在の文学者の名をもじった名を持つ人物が多数登場する。これらの作中人物は、実在の人物の類型であるとともに、戯画化された鏡像であり、読む者にその乗り越えを迫る。鏡像を乗り越えるという巨人文芸のモチーフは、巨人の出発期において既に認められるのである。

## 団地に住まう「火星人」―安部公房『人間そっくり』

の空間―

野口 勝輝

安部公房『人間そっくり』は、一九六六年の『S・Fマガジン』（早川書房）九〇―一〇月号に連載された作品である。本作品は「こんには火星人」というラジオ番組の脚本を書いているラジオ作家のもとに、火星人を自称する男（以下火星人）が訪ねてくる場面から始まり、火星人とのやりとりを通し、ラジオ作家の現実認識が少しずつ揺らぎ、ついには現実と虚構の区別がつかなくなってしまうまでの過程を描く。舞台としては団地が設定されており、ラジオ作

家と火星人とのやりとりは、すべて団地のなかで行われる。また、ラジオ作家、火星人は同じ団地に住んでもいる。そのため、本作品を理解する上で、「団地」という空間を無視することはできないだろう。

本作品についての研究は進んでいるとは言えない。また、永野宏志「読者にセットされる異物―安部公房『人間そっくり』に関する覚書（二）」のように同時代における人間観の変容との関連から分析した注目すべき論もあるが、作品内の空間に着目した先行論はまだない。そのため、今回の発表では作品と同時代である一九六〇年代の「団地」という観点から作品を読み解いていくことを試みる。

## 横山秀夫『ロクヨン』に描かれた「組織」と「個人」

―中国の「法制文学」と比較して

張元

横山秀夫は、犯罪捜査を主体とする従来の警察小説に、新しい機軸を開いたミステリー作家である。『ロクヨン』は『別冊文藝春秋』にて、二〇〇四年五月号から二〇〇六年五月号にかけて連載され、

二〇一二年十月に単行本として刊行された長編小説である。物語は、D県警広報官三上義信を主人公とし、昭和六四年と作品内現在の平成一四年とに起きた二つの誘拐事件との交差を描いている。警察組織の内側に鋭く切り込んでいるところに特色があり、刑事部と警務部、中央と地方、警察とマスコミの葛藤が描かれ、警察組織内の抗争や組織の中で生きる個人の生き方に焦点が当てられている。

本発表では、作品構造をとらえ、警察組織の中での葛藤と矛盾の描かれ方の考察を通じて、日本現代社会における「組織」と「個人」の関係性がどのように表現されているかを論じたい。その際、比較参照点として中国における「法制文学」をとりあげる。「法制文学」とは、犯罪捜査組織である警察を中心にとりあげた中国の文学形式である。『ロクヨン』における「組織」と「個人」の描かれ方について考察を加え、さらに、中国の「法制文学」と日本の「警察小説」との比較検証によって、両者の特徴を明らかにすることも目指す。

## 〈講演〉第I会場

ウェブ時代のセルフ・デザイン論とSNS、インスタ映え、意識高い系

鈴木 謙介氏

### 〔講師紹介〕

鈴木 謙介(すずき けんすけ)

一九七六年、福岡県生まれ。東京都立大学社会科学部研究科博士課程修了。国際大学グローバル・コミュニケーション・センター研究員・助手、関西学院大学社会学部助教授を経て、現在関西学院大学社会学部准教授。国際大学グローバル・コミュニケーション・センター客員研究員も務める。専門は理論社会学。『暴走するインターネット』(イーストプレス、二〇〇二年)を皮切りに、ネット、ケータイなど、情報化社会の最新の事例研究と、政治哲学を中心とした理論的研究を架橋させながら、独自の社会学理論を展開している。また『カーニヴァル化する社会』(講談社現代新書、二〇〇五年)以降は、不安定を強いられる若者たちの感覚をベースにした考察を展開するなど、現代社会を幅広い観点から分析している。主要著書に『へ反転』するグローバリゼーション』(NTT出版、二〇〇七年)、『サ

ブカル・ニッポンの新自由主義——既得権批判が若者を追い込む』(ちくま新書、2008年)、『SQ"かかわり"の知能指数』(ディスカヴァー・トゥエンティワン、二〇一一年)、『ウェブ社会のゆくえ——多孔化した現実のなかで』(三才ブックス、二〇一三年)などがある。また、二〇〇六年一〇月から、『BSラジオ「文化系トークラジオ」』のメインパーソナリティも務めており、その放送は『文化系トークラジオ「e」』(本の雑誌社、二〇〇七年)や『文化系トークラジオ「e」のやり方』(TBSサービス、二〇一三年)として書籍化もされている。